須壽美具たし　上

中村進午文庫
文庫5
132
1

事(コソ)もかくありしが。今の事(コト)ハ殊(コト)に海龍神(ワタツミノカミ)

の恙(フツ)に詣りしに。さるハ池も川も河海にあ

せて。さまでかは龍田嘉ハ吹つくる勢多

まへど。これもわづらはき風のこそそいづこ

小源とらしも海も侍りしかるすハ年比

海をとバすとともおのれぞ。やうくこゝ計も

浮つく時ハ。あるきこゝの海や。ゆかねうも

まかるまゝやなど。いひつゝしなりし

早稲田大学圖書館藏書

早稲田大學法學部圖書室藏書

故中村進午博士記念圖書

所屬 HK 中村進午文庫 番號 9274 小番 1

所屬 HBS 部門 VII 番號 125

地

文庫 5 132 1

昭和三十三年十一月二十七日 法学部研究室より移管

昭和十五年一月十六日 中村木天氏寄贈

罪にこそと。終日(ヒネモス)になきなげきてぞいと
かしこかれど。天雲をわかるに踏(フミ)あたし
鳴とよのてのすふ御神をさへ清(コト)のこなる
はするなり。菰(コモ)枕ゐるくたれして眼をさ
ましつゝ。例ておもふにむかし見さりしおり
ぜんかりし歯くおびしつるかくの。
いと涼しかりし除(キハ)を今ぞはんとをきり
そおりくべ見よまへさまつるまぞれも待

ばやそ起ながりてぞうもしこてもわ
いつけてとるはいとくさしく卯(カヘリ)てゐ
そるふんをきりつるなのしさにはしたるばあ
うそんの百(モヽ)と筆のひろつにみむ。とどめ
てやそれる。ましてえこも人は何ともれ
ところばやおもむしむ。
伊予の国は海辺(ウナベ)に。吉田といふ所あり。これ
月ありそこよりてんぬ望する人のがり

とぐまる。さて五月ごろと云に。みよりの同し
国の小濱と云所に行うとらるといふ主方(アルジカタ)
よりさしやうる。みに加子をもりつけ
く。我をの船て送まりぬつゝみより打
乗りて出る。ごてハ入ゆてゐる湊(ミナト)まハ。み
沖をとかろ所よりて大きさハ漕入(コギリ)来(こ)ぬ。
さるハいさ船ともる所或ハ近き所よりよ
来のこそ。をちこち漕つきより。山ハ高るう

で本三たらしハにおひさら。崎くハ面白う
海原に指わたく。白濱ぞろ所にハ。網を乾(ホシ)
鹿け。奥家(ナヤ)めく家にハ。いとうもく烟の
立のぼるが。風をいとうて磯山わによず
さふらでもあハきるけしきえ。日くらし
いふ蝶のこてらり鳴きりて。此方彼方(コナタカナタ)飛(トビ)
うつるかどよ。日ハたや暮ぬめり。さて山
向の水門を漕出るに。風ハいと細(ホソ)う吹きぬ

に吹のぼりて。さゝ波おこるに。船ハ
矢よりもはやく走る帆をあげた
るハ。鳥飛(トブ)がごとく見え。雲を見れバ波の上に
伏られて。天の海、潮ハさくなよりに流落
ることも見え。日も入るときになれバ。風収涼し
くて。潮と云ふ物の海原にあるなり。さり
くと鳴きやみて。

○武蔵の西。秩父(チヽブ)と云山間に。赤岩(アカイハ)といふ所

あり。こゝハ或大徳のかくれ家に作りて。いふなれ
おりしける岩屋(イハヤ)の室(ムロ)なり。見れバ[illegible]
つきはそこよりて。屋ともに。凝(コゴ)々しき巌(イハ)
根を廻ぐりある水の音そ先清し。目
の前にも見ゆる蓮(ハチス)の花形(ハナカタ)せる赤銅(アカヽネ)乃
柱にそへりつ。又溢落(アフレオツ)るハ長き白紐(シラヒモ)を
さしおろしたるごとく。深き谷(タニ)べに流る雲
梢おひかゝりたれバ。日の影みえず

さ路にけに吹風ハ峰葉斗の音せり。そよる扇もたちおけバ。まして蚊屋絹(カヤキヌ)引たらむ程もなし。

○道奥(ミチノク)に下りて底をとるもしるに。元の流といふ林の下に深き渕のあるに。つく水潜(ミクヽリ)ある男を入て大網をひかせ。鱒(マス)うぐひなといふ魚をとらえむ。さハなはに鱠(ナマス)にして喰ふ。さて大きやかなる木の陰に。鴨(カモ)なども多くて飛まじバ。

○武蔵下総の両国に。かけわたせる橋のもとに。川柳のさしかゝる所あり。そがもとに(チヒ)さきあみうけて持網(モチアミ)といふものを指おろして。夕汐にのりくるうをとるゝ手長(テナカ)海老といふあり。そこいとよきさ。空ハ水の如くすみて。うきたつ雲ハ西の風に吹けちらされバ。はるかさきまで。富士の子こそ云あるも。筑波

岸こそこゝなれ。さるハなとこちの方よこし
とて束縋(ツカニヾ)つき筆して。波のうごくまゝに。
怪(アヤ)しき鳥の飛つけむとみれバ。紙ハふき
とりきて。

○伊勢の国亀山の玉府を。又ほの曉に
通り侍るに。俄に夕立の雨ふりきて。神いと
いかしう鳴とよむなくに。打寄る家にハ
ひ入りて。あゆみたる。雨ハ瀧のごとくに降

落て。木積(コツミ)なとを押流しもてゆく。
さるハ家の前(ヲチ)童(ワラハ)とものが。押ながしそめし
そなといひさわぐ。さて雨ハ降止りぬれど
とゞろぼこゝに神のとよみこえしいと遠除(トホツキ)て。
今ハをちこちの方ぞいとゞ降もしておぼゆる
ふ。鈴鹿の山の方バいと黒く。木群(コムラ)しげき
やうなるえつゝ。ぬきたる森の上に夕日影
の指わたりたる。又なくうれし。始の下と

いふ驛(ウマヤ)に在るに。月の影さへいと冷やか
なり。けあかつき舎(ヤドリ)を立出る際(キハ)もまして。
○又月の朔日豊前の國なる羅漢(ラカン)寺(ジ)に詣づ。
川に添て行道ハ崩(クエ)落されバ。其川の邊(ホトリ)
の岩山をきりうちて人のかよふ路とし。
さハ落をとおしるゝさへ行ふがりまし
よりそこを行に寒き風吹とほして。
冷やかなる滴(シヅク)の笠の上におちくるぞ涼し。

寺ハ山ひとつが岩なる中に造り立いき
されバ。
○阿くつき神瀬山にまうでゝ。寺のあなる
欄(オバシマ)に立よりてみれバ。谿風遠に谷より吹
のぼりて。瀧の響そこととほし。
○水無月みつか計宇治川ちかく住人の
家に屋どりて。子の時ばかり小窓をとさ
ましてきけバ。

○ある日のまいとおつれさに。越(コシ)の後(シリ)なる
る国といふ国府を遠く。道十里(サト)ばかり
あなく関居(セキスエ)なる驛(ウマヤ)にやどる。湯浴(ユアミ)などし
てふせるまでは。いふ今秋のあつけさ
をぬきむとおもひ居るに。俄(ニハカ)に山風の
風吹おこりて。庭の葛葉ふきさわだ立ぬ。
○常に大殿の御前(ミマヘ)にさふらひて。御物語
仕うまつるに。やりみの心だくへおもし
語く行見へりて。此庭のいと廣き夜
はかくてこそ。
○下総の国の牧(マキノ)牧は。草のいと高くおひ茂り
くあやしり細き庭のこゝりかふなり。
さてこれ尋ねゆけば。夜の草むらの日に
むされて。かをりあるがうへなくて。ぶちは
足こそ今ふかくあつき日に照さけて。
風はさらにくる吹どもかのかをりぞ枯(カレ)さ

つらふくおもかげさて河辺のすゞしさにすゞみて。
息づきけるに。やがて家村のまへに出し
やをらへだゝるこの萩原を吹わたりて。
夕風のそよぎ出るこそおもしろかりける花を。
○瓜洲の岡べりに。柳のいと大きなるがありて
よぶ渡り人おほくしきみて渡し守を呼(ヨブ)
なまぬれば。あさ瀬のいと清かる所に白き
鷺のあまたつ下(オリ)立てるが冠の毛を河風に

吹なされたり。
○文月のはじめ。二荒山(フタラヤマ)をねこえて直(ナホ)よる原(タカハラ)
とふ山を越て。會津(アヒヅ)の方(カタ)へ行に。夕つかた
小みちば谷川にそひたるかけたる家に宿る。
あたりいと清げに夕風吹わたりてこ
日月のさし出たり。
○紀(タバス)の涼しさといはゞ。かりて拾ひあつめしおほ
やしきそでといふぞこそあきびと

むし暑の降来。此面彼面（コノモカノモ）に立つくもみど
ろなるに。晴されば。木の葉の雫とめやうに
おちて。
○木曽の山路をゆくに。こゝかしこの七ヶ所。
雲のいとおそろしく立くるが。神ぞ鳴く
きゝいなせむとおぢぬるに。さらずして夏の
一ト痛降（イタクフル）。蓑代衣（ミノシロコロモ）着も会（アヘ）ずて。ひぢに
ひぢて暫時（シバシ）笠やどりせし。山風吹のぼるに流

まで。雪の消ゆをこそれバ。漸く甲の時斗
なりぬ。ゆきて福島のうまやにやどる。谷
川をこゆれバ。七ツの松の月影ぞ波の上に
うかびける。
○美濃の国なる寺村川の辺りに立まよふ人
のあるバ。鵜川断（タツ）もさうと見むとて又は
れもそこに屋とりて夕になるまでバ。かゞり
うけて。さし出る岩の陰に竿をとどめ

て待ほどに、よろ川よりの舟にかゝる
の篝さして漕下り来。近くになれば、
炎の影のいとおそろしく又たのもし。
さハ十まり二つの鵜をひとりしてた
くみにいと苦しきさまにて、ほのめかせば、
鵜をバかゝるとも、はおけちてかの鵜にも
魚喰せなどし。あらく川の上にも
走りて、おのがまゝにもあやつるなり。

又舟にひきつれば、いとくさひきゝる
さまして、羽根ともはなくるも
ハこびすてゝ、影を指をして眠るさまは、皆
舟をつなぎて、おのが家にかへるも、川
風のいと涼しきに。
○こゝにつき十日。備前の牛窓といふ湊に
船泊て、風のいと涼しきに。苫屋かこの上に
のぼりて、こゝろを見れば。都従西の国にある

人の老たるなとして平屋かくの上に打
足組（アグミ）て碁打て居たりけひしの袂ハ
ひらくとおそよくなり。

○あまつさへなり康爲の方へ手従（ユ）するに。
男とりのまる渉みとていとふかき所に追
入（レ）て川柳のさし枝おしおて手になぎ
もち肩（カタ）ゆ尾筒（ツツ）のへまかき振（ナヅ）きバなるハ
いとをかしけるなり。

○若狭の小濱に行てこれつきたりける
にぎめしつきたる男瘧（ワラハヤミ）の心地しけれバ細
川といふ所やに屋とる寺の山おもて
はせて心よきひゞを浴ひなどせしを又
裏の谷川に簗（ヤナ）うちたれバ鮎子の寄る
とて此里の子どもあつまりてあり
に来。いとおもしろき山の林なりしバ異聲（コトコヱ）に
鳴蝉のこゑのおちいとはかなれに聞（キコ）えん

く。をちこち鳴きつるほどに日ハ山のはにかくろひぬ。

○嵐山の此方の川のべに。群居(ムレヰ)て涼とる。何つさき日ハ峯よりくれて夕ぐれのいとゞやきん魚とるも。取つるなり。

○清瀧川にゆけバ。つゞじにおりてきりけるも。そゝりにおちゆ。夜ハこゝにまたねむや。

○いと廣きおましに。唐のともしろきにおを敷て。そがうへにんえきるなどち静かにありつひし。午時(ヒル)斗ハ水飯(スイハン)やうのありさまで。ゑこうしうち眠るよ。清き湯あそびもありつひてや湯帷子(ユカタヒラ)などいつよ。やりて湯浴(ユアミ)して。さて西日の紅弱(ヨワ)りたるよ。四条の大路を東さまにゆきて川風にあひつる。

京都帝國大學文學部圖書室藏書

○いさゝけのゆかりありていと貧しきが。
今朝ハとくまかりてみどせちよ吹ゆき
ハ黙もなかりしに。今朝ぞ蚕といふ虫ようひ
殺されむとひとりごちてさるよ苦む
なるに。ひやしき蓬りて来て夕皃の花
のいと白くさきたる棚のもとによりに。
さてこれハ蜀黍の丈高う生ひたる
茎のひらめくいと涼し。

久しく尾張の名古屋よありて。これ
つきの末まで里なるよなどち送りに。
いとあつき日なりしかバこゝまでおもほえ
きとて。或寺のおまへいと海ちかきにて
宮なる海畔の家よ汐のみを待るが涼
しかりけりとて舟よのりハ丈ありし。
漕出るまゝくこれバ渚よ立るゝ人ども
の。おどろきさへけが帯おとしける

涼し。赤松のかげしぞこゝにあるなるの如
も見られ。

○いとさへかりければ。墨田川のこゝろさまに。赤打
山といふあるがれしは。さし出る渚（ス）の。菰（コモ）
いと茂くそびえける所に。一丈（ヒトタチ）ばかり
なる舟うけて夕ぐれの月をとるに。影ハ
写りしにさしまねく波のうへにたゆたふ。

○箱根山に。十の湯となむ云温泉（イデユ）のあるに。
こゝろつきなかりけて旅寝せるぞ。夜と
しもねむえざれば。軒よりゐりて月のながれ。
又あやつき雲にあぐるおくハ。川よの蛙（カハヅ）
いとおもしろきこゑしてなけり。

○松杉高くおひ茂れる山の寺の。洞な
せる川に立ちそれば。

○厳島（イツクシニ）の島端（シニワ）に来なりてぬ。かくて登り
てこゝれバ。百（モヽ）まり八つの燈（トモシビ）ぞ。見さとも

めく七家の影に流らにてらして。親
ハ汐の満来るにうつろふ。
○宇佐の御神にまうでゝ。即その祝(ハフリ)子な
る人の家に宿る。親ハいとねもころく
苦しくも臥(フシ)たるに。暁がたより出て宮の
うつ井に立出るハ峰も月ばかりのん
ほとて。
○七月(フミツキ)七日肥前の西園寺といふ所に着ぬ。

今朝みむみなもだゝりの山の朝戸をとり
てどうふもかくまも明日(アス)ハ長崎にあむむ多
へきとて行。朝ハ丑たゆりあつむ海路(ウチチ)を
これバ海士(アニ)のいさり火沖の方にちらつさく
見ゆ。鶏の声の呼ゆるをとのそうすて。出
宇の家にたどりつけバ。ゆくつきの里
の朝ハ峰さらくとして。並る松の
風ぞ。波のむさ吹すぐる。

こゝのつき頃の夜。西の風いとはげしくふきまよ
ひぬきバ。大はのべゆ、火を出しく。
辛崎をさしてゆけり。其の光りは船の
影のうつるにおどろくにやあらむ。魚(イツキ)
にすむちどりなるうとの海の中にをどり
入けるハ殺さぬ物とて多く放ち
きるさるハ其のこえこれハ。十より二まで
ハ入りける。是喰(リハ)てなどいふ人もなくけり。

さて是より多くぞ此の給りしが
やゝ間あり。

○これつき頃の松伊予の国よりなるこゝの
濱と云より。松山の国府(コフ)にむけられてけり。
松ハ此立ていと清き志賀路之浦の為ハ
背向よききこえて。

○こゝのつきとき此のこゝるにまうで。或院に
やどりし。さるひとハありのごとく

ゐなり。そがうへに衣うしなへとなし
いひさ。夕ぐれの夜志めやかに涼出するに。
槙(マキ)の葉に露こめたる。

○湯浴なとんよくして四条の大橋と南
北西に下る川のへに立てられバ。高瀬
舟を繩手して川のぼる。日も入されど。
人影もさらで。

○たゞめて浪花に行人を。舟ゆゑて

くる。せんどうの声をそゞろふ。又牛車
なむ見えつくに。日の暮むとするせんに。淀の橋
とるべきやうにて。竿さして男に幣されて
ぞいそぎてきりたるさて橋ハ是之といふに。
くハなりの多く飛散るなりの車ぞあさと
汲くしていそうしけるなり。夜ぞなりハ彼(カレ)
みざふなしもやといふ人ぞいと肥(コエ)て汗(アセ)で
めり。さるハかく涼しき世界(セカイ)に小さへ。

○夜光といふものむかしより伝るがなかに
沈でみひかる。天のこんハ今だもかゝれ
ありしをさて枯ひたる畑の中に。神杖
とおぼしきが立るほとに。小さき社のほ
とりに。赤き髪をかりける。星の子虎のかみ
くあつまりて。古き鼓をおなし居ぞ
おもしろけもなき。さるハ天の神の咒ぞれ
まなくしともおぼえず。などさることもこれハ咒(カナフス)

隣来ざてられば。大路もはなれて谷川
なども水いと黒きみのまさぐりたるに。川
添柳ハ風に吹なびかれて。波のまにまにゆ
むと見。沢蟹(サハカニ)なんど云虫ハ簀(ス)のこのうへに
はひのぼり。鯰(ナマズ)なんど云うをとハ。井の底に入
かくれて。宮を仮ふとかまへたりざるさまに。
河ぞこよりいさありせるに。いと涼し。
黒鴨といふ鳥の雛ハ菰(コモ)の中よりくれてぞん

うきゝりのもと夕立の雨のはげしく降
たるに。水のまさりて。魚の隠るべうも
あらねば。あやふくとびきたるをゆでん
とくよれ池のくまにおちてける。
○田面の蛙おもしろく鳴ける夕。門田に
稲葉に秋の立のぶるなむ。
○いなつまの光ハ火をときり出せてありみて。
いと黒くこゞりたる雲の中よりあらは
さるにこあきバ稲のたつむとて里人ハ
悦びめり。さてあらしといふなるに清き
風の吹出て。おそろしげなる雷ハいづち
行けむ。
○稲ハ雲居とふ物ハ翼(ツハサ)をとゝるとてねハ噎
拾(ぬき)されバ高く飛べうもあらぬなり。さる
時をおりて小鳥ども寄てかの飛るべき原
の草葉をとるとしにバ本陰もなき所

なきバ。螢照りみてうきてゆきかくれ
するさまは夕顔にあれバ。水のいと凄う
流れて浜辺の一むらしげりたる木陰に庭
ちうひて蓮の鉢の先を打破りける
ふねをこぎ出して鷺の嘴くひそこぎる
どもに。又水をおしてきこえれバ。つく
利る八瀬の水浴もまてなりさるるに
人皆ハ夕風にむかひて瓜食。

○ここつき吉祥川ハ鮎くみしとて好。
山の高き低きのぞきふいとなつく。
くづりはいとゞ涼しのましてこの川のくバ。
笠屋とりしれるに醒ヶ井備と作
りて売る家ありしかバ。先ねまゐと
ひて。
○大納言とのまでいまぞありしがぞむき
ゐましひて佛とそめておはしひておはしける

あり。我んよく知りおほしてたり。又ほの
ありしめこ作して清水の飲世るよ語
て。吾妹の歌のりとうすこ寺よやまとふ。
しけはおくりゐて風んよく吹けり。
○土佐の国よこれつきたりけて慰むてき
もるく。夕暮ふこりり沼のいと廣おとり
ふ出てこれバ菱の実を採とて。こハ花
あまなりて漕ぎくる。そが中よ笛と吾ん

おもしろく吹なりきそが。中くよ其色の
ふくべとてのへるよハまとりて涼し。
○文月のなかハこちのくよ下るよおとりく
る男つとめて起出る癖ありて。鶏鳥鳴
てまるよ。今鶏いとおくまさるとて。
むつけておき出ぞり。いとねむりとく
ぞ。今ハ浅香山もさへ見ゆるとよ
こすふ恥とといふよ。さらバとておき出て

りまさあけぐさろるなこれバ。なるゝしぬ
庵のくよ。松のいと繁く生立るなみぞが
わとは山のみといふありと云。そこは餅
うる家のあしくバ。戸を扣きてあるじを
呼おこしつり。かくて松風の山よりふき
おろしぞ。

○伊与の国小津（ヲツ）といふ所につく。気きるな
とちらりしと夜もるよ。ひと日二日居きり。

かくもうるまよ。夜二日三日次て降つゞきお
るる川のみくりも多ゆへくるりぬ。居る
所なむ岸よのそゝそ。いと高く涼しき
舎りえ。さてかのなるさ水を小舟にて揖（カイ）
立るか押きりてゆくりき。何すよりし
ありくバ。わのくぬの子がいとこを切殺して。
血つきさる太刀をひききけて。そこなる
竹むらの中よりくま入りぬと云え。所の字

る様にのぼりおりして。少しあゆみつかれ
とりにあはせて彼にあたりて切へし。
けとより焼太刀の廉おなかして戦ぐ
きなる。よつくんをひして糸手。我ハ宮ゆ
ゑむとのこまをにようし之。さる君に川ハ
いやまさりて。唯今まもてつり叶ふべう
にて。たどりふほいそぎいそがせてきハきる。
若き武士やくりうろしまてぬれしくわる

小ささ笠をとえ。身にハ金衣とよりのを着
て。いとくもく重なる太刀をとりてかこ十
人斗小みを漕せてのりいてめつ
なるこしのさバ。是をともとて此方の岸
にハ人くたとしむきて目をとてるたれ。世よ
河むかひのきしのひそてうしこうしぬ梅きて。
まここをまたつり。舟ハつちつりして着ハ。お
はグりて鍔うちなをし。鞘の口をゆるめ

さぬるとも言出されつゝの竹むらをさして
けり。今ぞ此川原に追出してそうさめ
至ところに何のるすもなし。さて川ハ流り
叶ハぬなりぬまじバ。とありつるをといひ越る
人もなし。又待つ人ハしびきといふ所に
うまて。足を引てなむけりあられぬ。
わづか三日計して其の後ふ時にきけバ。
かの人をとらへる人ハとくたちむかひの

中に狭かりきやかりこやせるとなむじ。さてこそ
ちろまりくりしなりければ。夏の後八日に
く涼しくなりつれバ。其時のことハ忘れ。

○伊勢の国いせきといふ所に。少しくありつる
なりしのはまにいてやどる。いとしろき所まで
風ハ常に吹いる。向ふらちの山に。貝の石
になりけるかたるなりてこれバ。いとしく貝
といふ物の。ひしとこびりて大なる石に

なきり。そをとうちかきそてゆてゝくうりき。
なむしろもまくりて取ゑ。

○この月のはじめ。翠のうきやとたちて。
石部にふうまやに座とりけ。家のうしろ
ハ三上山まさしくなり。取にハ小さき冨士
と云ご。まことによきるうちちありけり。河ゟ
小風の吹とほしいりて寐侍つ。

○奈良なるもさゝがきど。七条大納言おり
まして盧舎那(ロルサナ)ぶとけの御堂のうちには
さわかる所もなし。夜ハ。

○中津の君ハ江戸なるころちハ塩竈とふ所
なり。こゝやひこみのきのくバ。ひさかるよめされ
てまうくバ。此庭の池水いと広きはおなるの
侍てあり。又南ゆ吹来るハ。阿房上総の
海びをつたふる風也。

○上総の様をもて此君の別業(ナリトコロ)ハ湊びたまて。

まちうくもちおりしまちてときハ。佃子
とまよまのあまりするば海の幸せうせのふ。
たのかないまうち君の此とのそいと広き。
ことのくたまもしろハさかりする時分。
いとあつけさはいく夜もまつのかりしよ。
○多度の峯と神徳と言社あるているこ
も夜のきあへさるも堅岩の峯よハ。
○加賀の国よ宮の傍に湊ありおくりて
ころよ。沖より舟の来るなよおもふときぞに
いと涼しき。
○加賀の国をとくいなの西をさして行。
これつき中の石斗するよ流海の西まそ
行るあぐるよやどる。合歓の花おもしろく
さきさる家まて。そぐりしよ湯槽をもとめ
ゆあこさせるよ。子ねうし頃の楷よ居て。
笑やよりゆしも明ともしり出て参ね。

伊勢の国なる吉山のなまよ知なる人み
かりやどる父母なるの和なり。此日々立の
しるもの夜のけまや。又山の中しるる
けまや。此和ハいと寒き斗まて。
○皺子花(じんカホノ)そいとふくけよあつけききみと。
切もく咲まてこれぞ花のみでとか
小咲なる。さて咲をくるまた太きなる川まて。
椎の本まや。いとくゝきぞみとめてふやらゝ

ひされバ。なや舟よのきと云ぐくてされバ。
お知る人ゝはうして守して居るえ哉
とく染てまそくこそ和ハそこの実は
居とる。和ふけて水鶏なぞ鳴なるこそ
ちのくみなえし。
○越の高なる湯尾峠(ユノヲタフケ)をこゆるは斗まこえ
なるのかりつくまよくいと寒し。中の川
田知と云ふ又さかり。

家住家の庭ハいとちひさけれど。
とも多くゐつま。いとあつくして。
夕つかたは水そゝぎなどすれバ。
○いかりはあつけきまよく。白虎の新男
社に幣（ヌサ）参（こうり）せし。国中に夜ふすも風
をふくめまするとぞ。夜ごとに家よそつゝよ。
ふれ時はやこなたちりまする。福は。風吹
かりて夜のそぞかりたる。我ハげなと。

かの御神のめでたひつるもとおもひさこ
アろてみなるあり。さて涼しきればかのまぎ
きふもべきおもひくさも侍りた。
かふハこなはのみなまでそなしそそね

猿友理

い43154